

マラリア再考（再興） —環境との関わり、日本への影響—

環境健康研究領域 総合影響評価研究室 小野 雅司

日本など先進国では悪性新生物（がん）、心疾患、脳血管疾患など成人病・生活習慣病が大きな健康問題となっていますが、多くの途上国では依然として細菌やウイルスなどによる感染症が最も深刻な問題です。また、これらの疾患は患者数や死者数が多いだけでなく、小児など弱者が主な被害者であることも大きな問題です。患者数、死者数とも、多くの最貧国が集まるアフリカ、特にサハラ砂漠以南の国々がその大半を占めていますが、アジア諸国においても決して見過ごせない問題です。

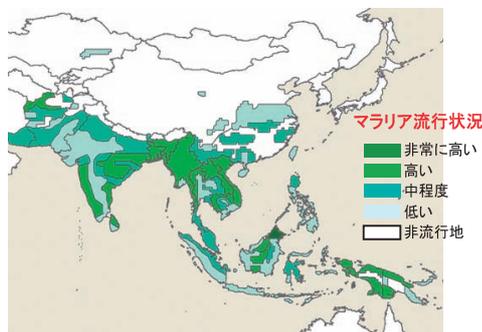
中でも被害の大きい結核、エイズおよびマラリアは貧困や人口増加と栄養不良、劣悪な衛生環境が大きな要因となっていますが、環境との関わり、日本との関わりといった点から最も注意を要するのはマラリアと思われます。今日は、マラリアについて、環境との関わり、日本への影響を中心に話します。

1. マラリアとはどのような病気か？

マラリアは、ハマダラカ属の蚊が媒介する、マラリア原虫によって引き起こされる熱帯感染症です。高熱と貧血、浮腫を主症状とし、重症の場合は死に至ります。世界中で107ヶ国、32億人が流行地域に住み、推定で毎年3～5億人が発病し150～270万人が亡くなっています。アジアをみても、日本や台湾などごく一部を除きマラリアの流行が見られ、その多くが熱帯、亜熱帯に位置しています。

2. 地球温暖化とマラリア

ところが最近になって、地球温暖化により現在流行の見られない温帯地域にまで流行が広がるのではないかと懸念されています。地球温暖化によりマラリア媒介蚊の生息に適した地域が広がるのが第一の要因です。これまでの研究によれば、アジア地域においても非流行地域から流行地域へ、季節的な流行から年間をとした流行へと、流行危険地域の拡大が予想されています。



世界のマラリア現況分布図2003年
(WHO: World malaria report 2005より引用)

3. 日本への影響

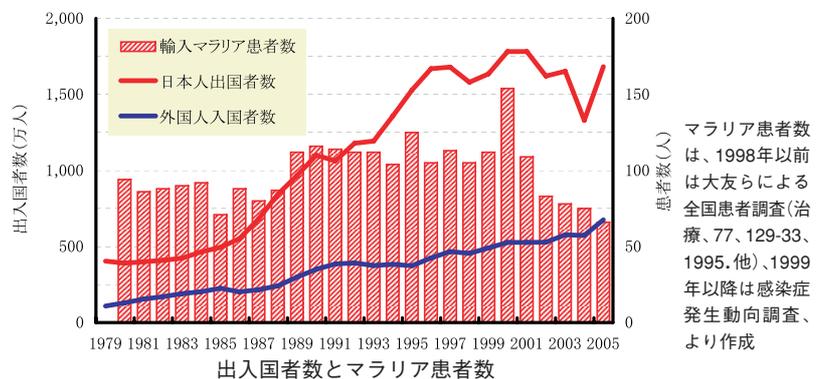
日本でも1950年代以前は全国的にマラリアが流行していましたが、媒介蚊撲滅など精力的な公衆衛生対策により1961年を最後に日本からマラリアは消滅しました。

では、日本はこれからも安心していただけるのでしょうか。実は、毎年100名を超すマラリア患者が報告されています。といっても、一部の例外（輸血や針刺し事故）を除きすべて海外で感染したケースです。しかし、マラリア媒介蚊は日本にも生息しています。三日熱マラリアを媒介するシナハマダラカは日本全国に、熱帯熱マラリアを媒介するコガタハマダラカは沖縄の宮古・八重山諸島に分布しています。地球温暖化によりこれら媒介蚊の生息域が北へ拡がり、生息密度が上昇することは避けられません。

一方、日本人海外旅行者の増加は旅行先でマラリアに罹る危険性を高め、外国からの旅行者の増加もマラリア患者の流入増加につながります。流入患者の増加と媒介蚊生息域の拡大が結びついた時、国内でマラリア流行の危険性が高まります。

4. 最後に

では将来のリスクを避けるため日本は何が出来るのでしょうか。第一に流行地域でのマラリア対策への協力です。マラリアやフィラリアを国内から根絶させた歴史を持つ日本の経験に対する期待には大きいものがあります。次に日本へ流入するマラリア患者の確実な把握と迅速・的確な治療体制の確立です。海外で感染しても、潜伏期間が長いため空港検疫で発見されるのはごくわずかです。そのため、帰国後発症して医療機関を受診し、初めて報告されることとなります。最後に国内におけるマラリア媒介蚊のモニタリングも重要です。病原虫、媒介蚊、ヒトの3者がそろわなければマラリアの流行は起こりません。マラリア媒介蚊の実態把握が将来の予防に重要になるのです。



マラリア患者数は、1998年以前は大友らによる全国患者調査(治療、77、129-33、1995、他)、1999年以降は感染症発生動向調査、より作成

出入国者数とマラリア患者数